

## おわりに

以上、当科のこれまでの歩みと現況ならびに今後の展望について当院の周辺事情を考慮しつつ若干の私見を述べた。麻酔科は単独でなく他科との連携協力の上で機能を発揮する科である。この基本は将来も変わらないが、麻酔科の在り方は病院の方針によって大いに影響される。当院にとって望ましい麻酔科とは何かこれからも模索してゆくつもりであるが、当院各科のさらなるご協力、ご支援と忌憚ないご意見を頂戴したいと思う。

## 文 献

- 1) 里 康光：名寄市立病院麻酔科平成4年度活動内容。名寄市病誌1：55, 1993.
- 2) 渡邊昭彦：麻酔科開設以来三年間の活動内容と現況。名寄市病誌3：96 - 98, 1995.
- 3) 南波 仁：当院における麻酔科の活動。名寄市病誌4：125 - 126, 1996.
- 5) 日本麻酔学会人的資源検討委員会：一般病院の麻酔科の必要人員数－調査結果の分析により－。麻酔43：612 - 20, 1994.
- 6) 津島正憲：質疑応答。麻酔科医のマンパワー不足について。臨床麻酔19：398, 1995.

## 戴帽式あいさつ

院長 久保田 宏

看護学科第5期生の皆さん、本日の戴帽式おめでとうございます。みなさんの臨床実習病院を代表して、心からお祝いを申し上げます。

戴帽あるいは戴冠式という言葉は、代表的な辞典であります「広辞苑」には載っておりません。戴冠あるいは戴冠式という言葉は載っております。

この事実からもわかるように、戴帽式というのは、戴帽することに意義があるのではなく、皆さんが戴帽式にあたって、一生看護の道を歩む、その決心をすることに大きな意義があるのだと、私は考えております。

さて、2000年4月を期に始まる介護問題を直前にして、今、看護の概念は大きく変わりつつあります。従来よりも、もっと、高度な質の高い専門性が要求されるものと思いますが、それだけでは看護は成り立たないと考えます。

ナイチンゲールは、晩年、今世紀の始めになりますが、当時台頭してきた、職業意識に偏った看護を憂いて「白衣の天使」の話をしております。

ナイチンゲールは、「白衣の天使」は誰でしょうと問われて、次のような話しをしております。「天使とは、花をまきちらしながら、そぞろ歩きをする暇人ではありません。やんちゃないたずら坊主だって、ときにはそうするでしょう。『白衣の天使』とは、病棟の雑役あるいは掃除をする人達と、変るところなく、人の忌み嫌う仕事をきちんと果たし、健康への道に横たわる障害物を取り除き、汚水を捨て、患者さんの体を洗い、しかも、めったに感謝されない人達です。こういう人達こそ、ほんとうの意味での『白衣の天使』なのです。彼女達は患者さんにやさしい言葉をかけ思いやりにあふれた態度で接します。手がかかり、厄介ばかりかけた患者さんでも、亡くなったときには、エプロンで顔を覆って、胸もつぶればかりに泣き崩れる、見ばえのしない看護婦(士)はまさに天使です」。

このようにナイチンゲールは、話しておりますが、看護の専門性も重要だが、「看護の心」も忘れないでほしいということを言っているのだと考えます。

どうか、みなさんには、これから、このナイチンゲールの言葉を頭の片隅に置いていただいて、学業そして修業に励んで下さることを、心から念願して、戴帽式にあたってのお祝いの言葉いたします。

本日はおめでとうございます。

(平成11年7月2日)